

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(文中の①～⑦の番号はそれぞれ段落をあらわしています。)

① 東京みやげの詰まった紙袋を両手にぶら提げ、麻美は機内の通路に並んでいた。なかなか動かない先を見遣ると大きなバッグが頭上のトランクに入らず、中年の女性が四苦八苦している。

自分が近くにいれば手伝ってやるのだが、間には五、六人の乗客が立っており、手伝おうにも一歩も先に進めない。

その上、女性の次に並んでいる人が年配の人ならいざ知らず、ぼけっとその様子を眺めているのは大学生くらいの背の高い男の子で、手伝うどころか、少し苛々しているらしい。

まったく……。

心の中でそう呟くと、無意識に舌打ちでもしてしまったのか、前に立っていた広い背中の中男からジロツと睨まれた。

事態に気づいた若い客室乗務員が通路の向こうから現れて、女性の荷物を一緒に押してやる。コツがあるのか、荷物はあっさりそこらに収まり、滞っていた列が動き出す。

麻美の座席は運良く客室乗務員席の前だった。ここなら前の座席を気にせず足を伸ばせる。

荷物を棚に上げて席に着くと、赤ん坊を抱いた母親が、通路を挟んだ隣の席にやってくる。赤ん坊はよく眠っているようで、ふつくらとした腕をだらんと垂らし、その小さな指がぎゅっと握られている。

じっと見ていたせいかわ、母親が小さく会釈し、「よく眠っているわねえ」と麻美は赤ん坊の寝顔に微笑みかけた。きつと男の子なのだろう。淡いブルーのベビータオルに包まれている。

しばらく赤ん坊の寝顔を眺めていると、なぜか、さっきの通路で手伝いもしなかった男の子の顔が浮かんでくる。

この可愛い赤ん坊も、あつという間にあの男の子のようになるのよねえ……。そう思った瞬間に、今度は我が息子、高志の憎らしい顔が蘇る。

麻美は気を取り直すように売店で買ってきたチョコを食べた。口に入れた途端、渴いていた口の中で甘いチョコがとろける。

② いったい、この三日間はなんだっただろうか。東京での初めての一人暮らし。電話では強がっていたが、きつと心細い思いをしているに違いないと、仕事まで休んでやってきたのに、有り難がられるどころか邪慳にされて、気がつけば、悔しさ紛れに小言ばかり言っていた。

「あんたねえ、世の中にはリリー・フランキーさんみたいな母親思いの人もいるのよ。ちよつとは『東京タワー』見習いなさいよ！」

着いたその夜、見知らぬ土地で心細い母親を置いて、「俺、今夜、サークルのコンパだから」と渋谷に出かけようとしたときには、さすがに我慢できずにそう言った。

注1 リリー・フランキー作家。ほかにイラストレーター、デザイナーなど多彩な活動で知られる。

注2 『東京タワー』リリー・フランキーの小説『東京タワー』オカンとボクと、時々、オトン』のこと。

注3 サークルのコンパ、親しい仲間や同じ団体に所属している人々の集まりで、食事や酒を一緒に楽しむこと。

「もう面倒臭いな。今夜は元々用があるって電話でも言っただろ。……それにね、あの本は親不孝だった息子が反省する本で、母親が『少しは親孝行しろ』って催促するための本じゃないんだよ」

どっちに似たのか、③。

③ 羽田空港に着いたのは、土曜日の正午前だった。上京し、誰も知らない土地で一人暮らしを始めて早一ヶ月。正直、ゲートを出たら「お母さ〜ん」と抱きついてくるんじゃないかと心配していたのだが、現実はわりとあっさりしたもので、きよろきよろと息子を探す母の目に飛び込んできたのは、携帯で誰かと話しながら、「ここ、ここ、こっちだよ」とでも言いたげに、面倒くさそうに手を振る高志の姿だった。

「あんた、元気みたいね。良かった良かった」

「はい、はい」

「ちゃんと食べてるの？自分で作ってるんでしょ？」

「はい、はい」

モノレール乗り場へ向かうまで、馬鹿息子は携帯を切ろうともしない。やっと切ったかと思えば、「疲れたろ？」の労いもなく、「俺、東京見物に付き合ってる暇ないよ。今夜はサークルのコンパだし、明日の夕方からはバイト入ってんだから」と口を尖らす。

「いいわよ。お母さん、観光しに来たわけじゃないんだから」

この一ヶ月、息子がどんな暮らしをしているのか心配で仕方がなかった。「はじめてのおつかいじゃあるまいし」と夫は笑うが、はじめてのおつかいなら、こっそりあとをついても行けるが、東京で一人暮らしとなると、そうもいかないから心配ばかりが募ってしまう。

きつと男親には分からないのだろうが、身を削られるというか、ぽっかりと心に穴があくというか、気がつくくと、夜中にメソメソしてしまうこともあって、とにかく、これは自分の目で一度確かめてみると、こっちが参ってしまうと思ったのだ。

④ あれは高志が中学二年生のときだったか、当時仲の良かった岡崎くんのお母さんに「どうも二人でエッチな本を回し読みしてるみたいなのよ」と相談されて、「え？」ついこないだまで女の子よりトカゲ相手に遊んでいたほうが楽しそうだった高志が、まさか……とは思ったが、「そういう年頃なんだよ。放つとけよ」と夫に言われ、「分かってるわよ」と返事をしたまではよかったが、いつものように朝ギリギリに起きてきて食パンを口に突っ込む高志を眺めていると、いやいや、この子がエッチな本なんて、と思う気持ちのほうが強く、やっぱりまだ早いんじゃないか、万が一、本当だとして、どんな本なんだろうと、疑念が心配に変わってしまった。気がつけば、高志のベッドの下を探っていた。

出てきたのは健康的な女の子の健康的な水着の写真集で、「なりんだ、これか」と、思わず力が抜けてしまった。要するに④。確かめてしまえば、無駄な心配などする必要もないのだ。

⑤ モノレールで浜松町へ向かい、なんだか複雑な電車の乗り換えをこなす高志について、やっと郊外のアパートに到着したときには、午後の二時を回っていた。

朝から何も食べていないという高志が、アパートの前にある小さなラーメン屋に誘うので、炒飯くらいならすぐに作ってやると言ったのだが、米はない、卵はない、その上、待てないと我がままを言い、ならばと諦めて、そのラーメン屋に行った。

よほど通っているのか、店主とは顔見知りのようで、気軽に言葉を交わすので、「いつも息子がお世

話になっております」と挨拶すると、「いえ、こちらこそ」と丁寧ていねいに頭に巻いたタオルを取ってお辞儀じぎする店主の前で、「やめてくれよ、恥ずかしい」と顔を赤らめる。

しかし、たったこれだけのことなのだが、「ああ、高志にも近所に行きつけの店があるんだ」と思えば、少し味の薄いラーメンも途端に美味しくなるから不思議なものだ。

心配していた部屋は思いのほか片付いており、持参したエプロンをつけて掃除そうじするほどでもなかったが、せっかく来たのだからと、普段はやりそうもないサッシの溝みぞや、浴室の排水口はいすいこうなど掃除して回っていると、あつという間に日が暮れた。

約束は約束だからと無情にコンパとやらへ高志が出て行くと、悔しさ紛れに夫に電話を入れた。

「出かけなきゃ、出かけないで、友達ともだちがいないんじゃないかって心配するんだろ」と夫に笑われ、それもそうか、と素直すなおに思う。

息子のいない息子の部屋は、正直、他人の部屋のようだった。机に積まれた数々の教科書やノート。食べ残しのポテトチップス。テレビに繋がれたゲーム機のコード。

実家の部屋と何も変わりが無いのに、なぜかそこに自分の息子の匂においが無い。ただ、そんな他人の部屋なのに、居心地が悪いというわけでもない。

⑥ 翌日、高志が「どっか連れてってやるよ」と、とつぜん言い出したのは、麻美がつい作り過ぎてしまった朝食を食べている最中だった。

「浅草？ 六本木ヒルズ？ 銀座？ どこでもいいよ」

「あら、どういう風の吹き回し？」

「別に。ここで一日、⑥」

火の出ないコンロで苦勞して作ったあさりのみそ汁しるを、高志がそう言いながらおかわりする。

「だったらお母さん、あなたの大学に行ってみたいわ」

「大学？ 日曜だから開いてないよ」

「あ、そうか。だったら、外からだけでもいいから」

「あんなの見てどうすんの？ 普通の学校だよ」

高志はしばらく仏頂面ぶつちやうめんをしていたが、麻美の粘り勝ちねばりかちだった。

晴れた気持ちのいい一日で、高志の大学はここが東京なのかと思いたくなるような緑豊かな郊外の丘おかの上にあった。

幸い、正門も開いており、広々としたキャンパス注5を散歩しているだけでも気分が良い。

「あれが経済学部の校舎だよ。まだ教養課程注6だから、ほとんどその向こうの校舎での授業が多いけどね」

日を浴びた広々としたキャンパスに、ほとんど人がいなかったので、高志も少し開放的な気分になっていたのだと思う。

「どう？ 無理して東京の大学に来てよかった？」

何気なく麻美が尋ねると、「そりゃ、そうだよ。これから何かやるにしてもさ、日本の中心にいたほうが何かといいよ」と偉そうえらに答える。

注4 仏頂面ぶつちやうめん不機嫌ふきげんそんな顔つき。

注5 キャンパスきゃんぱす大学の敷地敷地。

注6 教養課程きやうぎやう大学に入学して最初の一年間で学ぶ授業。

「大学卒業して、就職して……、これからがまた大変だ」と麻美は笑った。広々としたキャンパスの風景が、高志には少し大き過ぎるようにも、これでもまだ小さ過ぎるようにも見える。

退屈そうに前を歩いていく高志の背中を、麻美はそんなことを考えながら眺めていた。夕方から高志はアルバイトに出かけていった。なんでも所属しているサークルで紹介されるスポーツ用品店の倉庫での在庫管理のバイトらしい。

「接客とかより、俺には向いてるからね」

そう言って出かけていく高志の顔は、どこか大人びて見えた。

親が大人になったと思うほど大人にもなっていない。かと言って、親がまだ子供だと思うほど子供でもないのだと麻美は思う。

⑦ 帰りの飛行機はさほど混んでいなかった。まだ乗り込んでいない乗客もいるようだったが、今のところ、麻美の隣も、通路の向こうの赤ん坊を抱いた若い母親の隣も空いている。

キツ過ぎたシートベルトを弛めようとしていると、通路にころころとボールペンが転がってきた。見れば、若い母親が赤ん坊を抱いたまま腕を伸ばして、必死に拾おうとしている。

麻美はシートベルトを外して、転がったボールペンを拾い、若い母親に手渡した。

「すみません」

「赤ん坊を抱いていると、ちょっとしたことでも困るもんねえ」

赤ん坊は相変わらずやすやすと寝息を立てている。

「男の子？」と麻美は訊いた。

「はい」

母親がそう答えながら、赤ん坊の口元を覆う肌着を指先で下ろしてやる。

「これからが楽しみねえ」

「そうですね。大変ですけど」

⑦ そう答えた若い母親の表情に迷いはない。ぎゅっと握られた赤ん坊の指に麻美が触れると、微かに小さな指が動く。

「たぶん、あとで目覚まして泣くと思うんですけど、すみません、ご迷惑かけます」

若い母親が申し訳なさそうに言う。

「泣いてくれるときはおもいつきり泣かしてあげないと。大きくなると、強がって泣いてもくれなくなるんだから」

そう言うと、麻美は座席に戻ってシートベルトを締めた。

(吉田修一『あの空の下で』による)

問一 ——線部①「前に立っていた広い背中の中男からジロツと睨まれた」とありますが、この時の「広い背中の中男」の気持ちを、機内の状況もわかるように八十五字以上百字以内で説明しなさい（句読点を含みます）。

問二 ——線部②「ふっくらとした腕をだらんと垂らし、その小さな指がぎゅっと握られている」とありますが、この赤ん坊の様子を麻美はどのように見ていると考えられますか。その説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 心に裏表がなくうそをつかない、大人を優しい気持ちにさせるかわいらしい様子。
- 2 自分ではまだ何もすることができず、母親だけに頼りきっているいじらしい様子。
- 3 母親がいなくなってしまうことだけを恐れ、けっして離れまいとする健気な様子。
- 4 ここで泣いては母親が困るだろうと思い、穏やかに眠りつづけるあどけない様子。

問三 ③ に入れるのもっとも適切な言葉を次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 本当に可愛げがない
- 2 まったく理屈にもなっていない
- 3 実に頼りなくて困る
- 4 嫌になるくらい一人よがりだ

問四 ④ に入れるのもっとも適切な言葉を次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 千里の道も一歩から
- 2 すべての道はローマに通ず
- 3 馬の耳に念仏
- 4 案ずるより産むが易し

問五 — 線部⑤「それもそうか、と素直に思う」とありますが、なぜ麻美はこのとき夫の意見を素直に聞くことができたのでしょうか。その理由としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 本当に高志が「コンパ」に行ったのかどうか、東京の町を一人で歩き回って確かめるような勇気はとても湧いてこなかったから。
- 2 東京で一人暮らしをしている高志と実際に会い、話をすることができて、それまで心配で落ち着かなかった気持ちに余裕ができたから。
- 3 高志はしよせん馬鹿息子なのであって、自分が東京で不安になった時、本当に頼りになるのは夫以外にはないとわかったから。
- 4 わざわざ東京まで出てくるほど高志の無事を真剣に願っているのは、結局母親である自分以外にいないのだと改めて確信したから。

問六

⑥ に入れるのにもっとも適切な言葉を次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

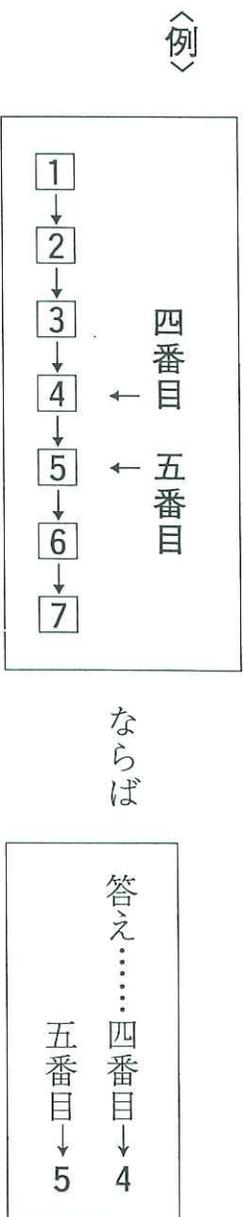
- 1 勉強ばかりするのはイヤだからね
- 2 バイトしてるワケじゃないし
- 3 料理だけしてもらうのワルいからさ
- 4 顔突き合わせてるよりマシだよ

問七

— 線部⑦「そう答えた若い母親の表情に迷いはない」とありますが、この「若い母親」は麻美からどのように見えていますか。その説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 子供が小さいうちは子供中心なのも仕方ないが、やがては子供の方が自分に気をつかってくれるようになるのだからその時を楽しみにしている。
- 2 男の子は女の子と成長が異なるので、女である自分にはなかなか理解できないが、この母親には逆にその違いを楽しむだけの余裕がある。
- 3 わが子の成長を見るのを楽しみにしてしっかりと育ててゆこうと考え、そのためならばどのような苦勞もいとわない覚悟ができている。
- 4 子供は成人すれば親から離れてゆくものだから、その時に取り乱したりしないよう今から強い意志をもつように心がけている。

問八 この文章の①～⑦の段落を、そこに書かれている出来事が起きた順に並べ直す場合、四番目と五番目にあたる段落はどれですか。次の例にならって、それぞれの段落の番号を答えなさい。



問九 この小説の終わりで麻美は高志についてどのように考えていますか。その説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 息子が自分のことを頼りにしてくれなくなったことに不満を感じたが、息子は息子なりに一人前になりつつあるのだとわかり、離れてゆくことにも納得せざるをえなかった。
- 2 息子が自分に甘えてくれなくなったことはさびしいが、今後東京で一人暮らしてゆく決心ができたのだとわかり、その将来に期待するとともにようやく安心することができた。
- 3 息子が自分に冷たい態度をとるのは離れて暮らしているからだと考えていたが、三日間一緒に暮らしてみて、それが成長の証だとわかり、自分の誤解を恥ずかしく思った。
- 4 息子の自分に対する無礼な態度に怒りをおぼえたが、東京で暮らしてゆくにはいつまでも親に甘えているわけにはゆかないのだとわかり、最後にはすべてを許す気持ちになった。

問十 高志は、東京に出てきた麻美のことをどのように感じていると考えられますか。六十字以上七十字以内で説明しなさい（句読点を含みます）。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(文中の①～⑥の番号はそれぞれ段落をあらわしています。)

① わしが悪かったのさ!

こんなことは、最初に考えておかなくちやいけなかったんだ! ——^{注1} コッローデイ

だれのことばだか、おわかりですか?

ジェツペットじいさんのつぶやきです。

ジェツペットじいさん? はて、どこかできた名まえだなあ、とお思いでしょう。^① たぶん、だれもが知っている童話、あのいたずら人形「ピノッキオ」を木ぎれでつくったジェツペット親方です。

親方は、友だちの桜んぼ親方から一本の薪^{たきぎ}をもらってきて、それで、^②ひとつ、すばらしいあやつり人形をこしらえようと仕事にかかります。

「そして、たちまちのうちに髪^{かみ}の毛^けをつくりあげ、それから額、つぎには目をこしらえました。目ができあがったとき、おじいさんはどんなに驚^{おどろ}いたことでしょう。まあ、みなさん、想像^③してもみてください。なにしろ、その目玉がぐるぐる動いて、じいとおじいさんの顔を見つめているんですからね」それからの話は、もうお話しするまでもありますまい。鼻をつくりあげると、その鼻がぐんぐんと伸び、切っても切っても伸びつづけます。口にとりかかると、今度は、まだでき上がりもしないうちから、もう笑いはじめ、さかんにジェツペットじいさんをからかうのです。そして、ぜんぶ仕上がると、ピノッキオは、自分をつくってくれた生みの親であるジェツペットじいさんの鼻をけとばし、それでも、じいさんがじつとがまんして、ピノッキオに歩くことを教えてやると、両足が自由になったとたんに、部屋じゅうをかけまわって、あげくの果てには、家の戸口から外へとびだし、逃^にげて行ってしまいます。

ジェツペットじいさんは、息せききってピノッキオのあとを追いかけます。

「そいつをつかまえてくれ! つかまえてくれ!」と叫^{こゝろ}びながら。でも、通りを歩いている人は、おもしろがって見ているだけで、だれもつかまえてくれません。やつこのことで、お巡^{まわ}りさんがあらわれ、ピノッキオをつかまえてくれるのですが、まわりに集まってきた人たちが、口々にピノッキオのことを、「かわいいそうだ! かわいいそうに!」と言うものですから、逆にジェツペットじいさんのほうが悪者になってしまい、人形を虐待^{さくたい}するということが、お巡りさんに連れて行かれることになってしまいました。

④、ジェツペットじいさんは、泣きながら、あのことばをつぶやくのです。

「不幸なやつめ! わしは、いいあやつり人形にしてやろうと思って、どんなに苦勞したことか! しかし、それもわしが悪いんだ! このくらいのことばは、最初にもっと考えておくべきだったのだ!」

ジェツペットじいさんがいなくなつたので、さあ、それからはピノッキオの天下です。彼^{かれ}は冒険の旅に出ます。その途中、さんざんな目にあい、その冒険物語がこの童話の骨子^{こっし}となっているのですが、^⑤、その冒険が子どもたちの心をとらえて、この童話を世界的な作品にしたのですが、しかし、

注1 コッローデイ、一八二六—一八九〇、イタリアの作家。『ピノッキオの冒険』は一八八三年刊。

⑥ 私たち大人にとっては、この話のおもしろさは、その最初のところにあるように思います。⑦

ジェツペットじいさんが、自分でつくりだしたものに、逆にさんさん注2翻弄ほんろうされるといふ点に、です。

なぜか、ですって？ だって、それは人間そのものの姿ではありませんか。人間は、いつも、自分でつくりだしたものに翻弄され、泣かされ続けてきたではありませんか。ジェツペットじいさんのように、自分が生んだ子どもに泣かされるといふような例は無数にありますし、科学や技術だってそうです。自分のつくりだした科学や技術が、いつの間にか自分の手に負えないものになり、逆に自分たちの首を締めるようになった、などというのはピノッキオ物語そっくりです。大人たちは、どうしてジェツペットじいさんを笑うことができましょう。

② 自分でつくりだしたものに自分が翻弄され、ひどい目にあう。これはまことに喜劇的です。しかし、考えてみますと、そのような仕組みは、どうやら人間の宿命と言ってもいいような気がいたします。人間を泣かせているのは人間であり、人間を手こずらせているのも人間であり、人間を非人間的な境遇きょうぐうに追いこめていゝのも、また人間なのですから。だれを恨むうらわけにもゆきません。人間の悲劇は天に唾つばしているようなもの、人間の涙なみだは「なんじ注8の性さがのつたなきを泣け」といふようなものです。責任はすべて、人間みずからの手のなかにあるのです。

では、なぜ、人間はそのように宿命注3づけられているのでしょうか。

⑨ そのカラクリを解きあかしたのは、ヘーゲル注3という哲学者でした。ヘーゲルはそれを「自己疎外そがい」と呼びました。自己疎外とはなんでしょう。それは、人間が自分のなかにある本質的なものを外にとりだして、それを客体的なものにする、ということなのです。人間は、だれしも自分の顔を見ることはできません。自分の顔を見ようと思つたら、鏡という外のものに写して、はじめて自分の顔を認識にんしきすることができるのです。それとおなじように、人間は自分の意識を認識するためには、その意識を外化し、対象化し、客観化せねばなりません。その意識の作業をヘーゲルは「自己外化」、「自己疎外」と呼んだのです。

③ 疎外ということばは、最近やたらに使われるようになりました。それは、人間が非人間的な状況におかれることを意味しています。けれど、疎外ということばのもともとの意味は、自分のなかの本質的なものを外にとりだす、ということなのです。たとえば、画家が自分の内部にあるイメージをカンヴァスの上に描くえがのも、音楽家が心のなかにひびいている楽想を五線譜ごせんぷの上に記し、それをピアノやヴァイオリンなどの楽器の演奏によつて表現するのも、いや、それどころか、人びとが自分の思っていることを言語というものを通じて外部に表明するのも、すべて、これ疎外と言えます。人間の行為こういにしても同様です。人間は自分の内部にある意志を、行動によつて外に示すのですから、これもまた自己疎外にほかなりません。つまり、人間は自分というものを疎外することなしには、自分を認識できない仕組みになつていゝ、と言つてもいいでしょう。

⑩ しかし、それなら、なぜそのような自己認識の過程を「疎外」などということばで呼ぶのでしょうか。

むしろ「結晶けつしやう」と言うほうがいいではありませんか。画家がカンヴァスに描いた絵は、その画家の才能の結晶であり、音楽家が作曲した作品は、彼の努力の結晶です。芸術にかぎりません。いかなるものであれ、労働によつてつくりだされたものは、その人の汗あせの結晶なのですから。

注2 翻弄されるゝ好きなようにもてあそばされる。

注3 ヘーゲル一七七〇—一八三一、ドイツの哲学者。ドイツ観念論哲学の完成者と言われる。

④ ところが——です。自分が生み出したこのような結晶が、結晶としてその人の手もとにもどってくるなら、それは申し分ないのですが、不思議なことに、いったん外にとりだされると、とりだされたものは、そのとたん、まるで自分とは縁のないようなものになってしまいがちなのです。自分とは無関係のようになり、なにかよそよそしいものとなり、それどころか、自分に敵対さえするようなものになってしまふ、というところに、疎外の疎外たるゆえんがあると云ってもいいでしょう。「疎」とは、よそよそしいということにはほかなりません。

たとえば、画家が絵を描いたとします。カンヴァスに描かれたのは、その画家が自分の内部にあった本質的なもの、それを外にとりだしたもののなのですが、その絵が完成したとたん、作品は画家の手から離れ、画商に買われて、画家自身でさえ手が届かなくなってしまう、といった場合がそれです。あるいは、歌手が自分の心にある想いを美しい声に託して歌ったとします。その歌がレコードに吹き込まれ、歌手自身から独立して商品になってしまふ場合も同様です。あるいはまた、人間は自分にとって必要な品物を労働によってつくりだしますが、しかし、その汗の結晶は、完成するやいなや、労働した人間から独立し、つくった人間とは無関係に、商品として売買されるようになってしまふのも、疎外のいい例でしょう。ですから、ヘーゲルの哲学に深い影響を受けたマルクスが、とくに労働のこのようなカラクリをとりあげて、それを人間疎外と呼び、そこから、疎外①②というものが非人間化の代名詞のようになったわけです。

⑤ しかし、もとはと言えば、人間は自分のなかにある本質的なものを、外にとりだし、それを客観化することなしには自分を認識しえないという意識構造を持っている、そのことからすべてが始まっているのです。ヘーゲルはそれを対自、すなわち、自分が自分に対向する状態と考えました。人間は何よりもまず自分自身であり（即自）、つぎに、自分を外化して認識し（対自）、そして最後に、その対向するものを、ふたたび自分のなかにとりもどして（即かつ対自）自分を完成させるというわけです。これが、ヘーゲルの弁証法と呼ばれるものです。

とすれば、もうおわかりだと思えます。人間にとって、いちばんたいせつなことは、外にとりだしたものを、つまり、疎外したものを、もういちど自分のなかにとりもどすこと、ヘーゲルの用語を使うならば、止揚することなのです。人間の喜劇、いや、悲劇は、自分が外にとりだしたものを、なかなか自分のなかにとりもどすことができないところに始まっているのです。

その最も深刻な例が、科学や技術ではないでしょうか。科学は、人間が自分の手で、自分が幸福になるろうと思つて考えだしたものです。ところが、その科学が、あたかもピノッキオのように、それを考えだした人間の手から独立して、手に負えないものになり、ついには人間の生存さえ脅かすようになってしまいました。地球そのものを破壊しかねない核兵器や、人間の生活をじわじわむしばんでゆく公害が、大人たちの笑うに笑えないピノッキオ物語なのです。ですから、私たちはジェットピノッキオさんとおなじように、泣きながらつぶやかなくてはならないでしょう。

「わしが悪かったのさ！こんなことは、最初に考えておかなくちゃいけなかつたんだ！」と。

⑥ しかし、待つてください。ピノッキオの物語は、ジェットピノッキオの泣きごとで終わっているわけではないんです。ピノッキオは、さんざんいたずらをし、冒険をして、放浪して歩きますが、最後

には、やはりジェットペットじいさんのところにもどってきて、いい子になります。そして、ほんものの人間の子どもに生まれ変わるのです！

これこそ、「疎外」からの回復、ヘーゲル流に言えば「止揚」ではないでしょうか。そうなんです。ピノッキオ物語でいちばんかんじんなのは、この結末なんです。疎外したものを、ふたたび自分のなかにとりもどすという点です。^⑬めでたし、めでたし。

そう思うと、ピノッキオ物語は、子どものための童話ではなくて、大人のための寓話ぐわのような気がしてきませんか。作者コッローデイが、ジェットペットじいさんにつぶやかせているあのことは、私には、現代人に向けられた警告のように思えてなりません。

(森本哲郎『ことばへの旅』による)

注5 寓話、教訓や風刺などを、動物などに託して語る物語。

問一 第一段落(1)について、次の問いに答えなさい。

(1)——線部①「たぶん」という言葉はどの言葉にかかっているでしょうか。もっとも適切なものを次の1、2、3、4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 だれもが 2 知っている 3 童話 4 ジェットペット親方です

(2)——線部②「ひとつ」という言葉の使い方にもっとも近い使い方をしているものを、次の1、2、3、4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 山ひとつ越えれば、あの村へ行ける。
2 これはあくまでひとつのケースと考えられます。
3 ここはひとつ彼に任せようではないか。
4 ひとつふたつと椿の花が落ちる。

(3)——線部③「も」という言葉の使い方にもっとも近い使い方をしているものを、次の1、2、3、4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 たしかにそのようにも考えられる。
2 英語もろくに話せないくせに。
3 考えてもごらん。
4 あまりくよくよしても仕方ないだろう。

(4) ④、 ⑤、 ⑦ に入れるのにふさわしい言葉を、次の1、5、6の中から一つずつ選び、それぞれその番号で答えなさい（ただし同じ番号を二回以上使ってはいけません）。

- | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|-------|
| 1 | つまり | 2 | ところで | 3 | だとしても |
| 4 | しかし | 5 | そこで | 6 | そして |

(5) — 線部⑥「私たち大人にとっては、この話のおもしろさは、その最初のところにある」とありますが、大人にとって、この話のおもしろさがなぜ「その最初のところにある」と筆者は考えていますか。「……ことを気づかせてくれるから。」に続くように、本文の第一段落(1)の中から三十字以上三十五字以内で探し、その最初と最後の五字を抜き出して答えなさい（句読点を含みません）。

問二 — 線部⑧「なんじの性のつたなきを泣け」とありますが、この「性」のことを筆者は別の箇所では何と呼んでいるでしょうか。それを表す漢字二字の言葉を、本文の第二段落(2)から探し抜き出して答えなさい。

問三 — 線部⑨「そのカラクリを解きあかしたのは、ヘーゲルという哲学者でした」とありますが、ヘーゲルは、なぜ人間は自分がつくりだしたものに翻弄され、ひどい目にあわなければならないと考えているのでしょうか。その「カラクリ」に対するヘーゲルの考え方を筆者が述べている部分を探し、「ヘーゲルは、」からはじまり「……と考えていたから。」に続く形に直して、四十字以上四十五字以内で説明しなさい（句読点を含みません）。

問四 — 線部⑩「しかし、それなら、なぜそのような自己認識の過程を『疎外』などということばで呼ぶのでしょうか」とありますが、ヘーゲルはなぜそれを「結晶」ではなく「疎外」と呼ぶのでしょうか。その答えにあたる部分を「……だから。」に続くように、本文から五十字以上五十五字以内で探し、その最初と最後の五字を抜き出して答えなさい（句読点を含みません）。

問五 — 線部⑪で筆者は「疎外」というものを「非人間化の代名詞」と呼び、また別のところでは「悲劇」と呼んでいます。そのようにいう筆者の念頭にあるものは何でしょうか。それをあらわす語句を本文から探し、抜き出して答えなさい。

問六 —— 線部⑩「ヘーゲルの弁証法」の説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 ヘーゲルは、自分の中から自己を取り出して考えることはなかなかできるものではなく、その結果反省することがむずかしいものだ、と考えている。
- 2 ヘーゲルは、人間には神を超越した能力が備わっており、いつかは必ず現在の矛盾や苦しみを乗り越えることができる、と考えている。
- 3 ヘーゲルは、人間には避けることのできない運命があり、深く絶望することでは自己の存在を明確にすることができない、と考えている。
- 4 ヘーゲルは、自己を疎外してしまうとなかなかそれをとりもどすことができないが、それこそが人間を高い次元へと発展させるきっかけになる、と考えている。

問七 —— 線部⑪で、筆者は「めでたし、めでたし」と述べていますが、それはなぜですか。その理由としてもっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 ピノッキオは最後にはジェットペットじいさんのもとに帰り、いい子になり、本当の人間に生まれ変わることができた。一般に、親は自分が生んだ子どもに、反抗期などで泣かされることになりかねないが、そうした「疎外」を経て、本当の親子関係がはじまることになる。われわれは、子どもという他者をはじめ、他人は理解し得ないという絶望を抱いてしまいがちではあるが、「ピノッキオの物語」は、親と子は最後にはわかり合えるのだということを見せてくれていると、筆者は考えているから。

- 2 人間は、幸福になりたいと考えてさまざまものを生みだしたが、核兵器や公害など、人間の生存を脅かすものをも生みだしてしまうことになった。しかし「ピノッキオの物語」は、最後にはそのような「疎外」からの回復を果たしている。われわれにも、なんとかしてこの「疎外」から回復して、本当の幸福を取り戻す方法が残されているはずだ。この物語は、ともすれば人間の未来に絶望しがちなわれわれに、わずかな希望を与えてくれるのだと、筆者は考えているから。

- 3 科学技術は、世界や宇宙をすべて解きあかすことができるものであり、われわれもそれに全幅の信頼感をもって接してきた。たしかに現在の科学技術では解決できないことも多いが、しかしそれにもかかわらず、われわれの科学技術に対する信頼は揺らぐことはない。「ピノッキオの物語」が教えてくれているように、現在の科学技術の未熟や人間の「疎外」の問題は、科学技術の発展でしか乗り越えることができないのだと、筆者は考えているから。

- 4 「ピノッキオの物語」は、今から百年以上も前に書かれた物語であるが、今もわれわれ人間に、いまだある種の警告を与えてくれている。それは、一度「疎外」によって自らの手を離れてしまったものは、二度と私たちの手の中には還つてはこないということだ。移動時間を大幅に短縮した自動車は交通事故を生み、価格を安くすることのできる食品添加物はわれわれの健康をそこなう。この物語は、このような現代文明の欠陥を気づかせてくれていると、筆者は考えているから。

三

次の——線部①～⑦のカタカナの部分漢字で、⑧～⑩の漢字の部分ひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

政治トウロンの場①に出席する。

その件についてフクアン②がある。

セツソウ③のない行動をとる。

医師④のシカクを取る。

敵⑤の悪⑤だくみをカンパする。

大学⑥で法学をオサめる。

事故⑦の原因をオシはかる。

大枚⑧をはたいて書物⑧を買う。

その政治家は権力⑨を専ら⑨にしている。

悪行⑩の報⑩いを受ける。

(以下余白)

国語解答用紙

受験番号

氏名

得点

一

問一

Grid for question 1, 10 columns wide, 10 rows high. A vertical line is drawn after the 5th column. The number 85 is written to the left of the grid, and 100 is written below the grid.

問二

Answer box for question 2

問三

Answer box for question 3

問四

Answer box for question 4

問五

Answer box for question 5

問六

Answer box for question 6

問七

Answer box for question 7

問八

四番目 (Question 8)

五番目 (Question 9)

問九

Answer box for question 9

問十

Grid for question 10, 10 columns wide, 10 rows high. A vertical line is drawn after the 5th column. The number 70 is written to the left of the grid, and 60 is written below the grid.

二

問一

(1)

(2)

(3)

(4)

(4)

(5)

(7)

(5)

5

Answer box

ことを気づかせてくれるから。

問二

Answer box

問三

ヘーゲルは、

Grid for question 3, 10 columns wide, 10 rows high. A vertical line is drawn after the 5th column. The number 40 is written to the left of the grid, and 45 is written below the grid. The text "と考えていたから。" is written vertically to the left of the grid.

問四

Answer box

5

Answer box

だから。

Answer box

問五

Answer box

問六

Answer box

問七

Answer box

三

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

(7)

(8)

(9)

(10)

ら

い

める

しはかる

Answer box

Answer box

Answer box

Answer box

Answer box

Answer box

Answer box